孫文記念館 館報 孫文
(財)孫中山記念会
2009年12月
No. 4
Sun Yat-sen Memorial Hall Newsletter

孫文記念館創設25年を迎えて

孫文記念館 館長　安井　三吉

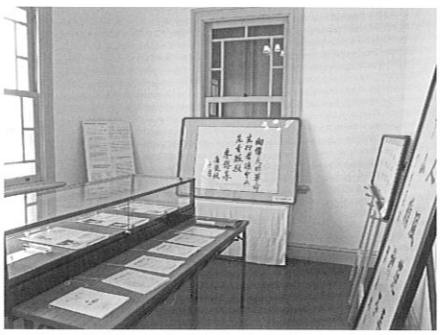
孫文記念館がオープンして25年目を迎えました。日本でただ一つの孫文記念館として国内外の多くの方々をお迎えできましたことをうれしく思います。そして、孫文記念館を立派に育てて下さった各界のさまざまな方々に、心よりお礼申し上げます。

オープン以来、館長は、山口一郎、陳徳仁そして狭間直樹と３名の先生方が務めてこられました。山口、陳の両先生はすでに物故されていますが、どなたも錚々たる方々であり、孫文記念館の今日は、こうした歴代館長のご尽力に大きく負っています。

私が移情閣をはじめて訪ねたのは、「文革」の余韻がまだ残っていた1970年代の末のころでした。床にものが散乱したままで、なにかすさんだところというイメージが残っています。ただ、そのころすでに移情閣を孫文記念館にしようという動きが始まっていたのでしょう。それからわずか数年、移情閣はすっかり装いを新たにして孫中山記念館（2005年に孫文記念館に改称）となったのです。

「天下為公」碑と解説プレート
（解説プレートは11月１日に除幕）

呉錦堂という明治、大正時期に活躍した大華商の物語、移情閣という由緒ある建物、孫文と神戸というドラマティックな交流の歴史、そして明石海峡という素晴らしい背景、それらが渾然一体となって佇んでいるのが移情閣、孫文記念館です。



「孫文2009」特別展会場風景
（中央は朱鎔基元総理の揮毫）

この25年間、館は、展示を軸に、孫文にかかわる数々の国際シンポジウムや講演会、地域の人々との交流を展開してきました。こうした事業を通じて孫文その人、日本と孫文、神戸と孫文そして館の主人公呉錦堂について親しんでいただくと同時に、神戸と兵庫県の国際化に対してもそれなりの役割を果たしてきたことを誇りに思っています。

さて、２年後の2011年は辛亥革命から100年目に当ります。講演やシンポジウムなどこの年をどう迎えるか、協議を始めています。「孫文・日本関係人名録」の編纂作業にとりかかっています。また、孫文、華僑などを柱とする「孫文記念館文庫」の創設準備にも着手しました。

こうした作業を通じて、孫文記念館のさらなる飛躍を期しています。今後ともご指導、ご支援のほどお願い申し上げます。

目　次

孫文記念館創設25周年を迎えて……(1)
25周年記念特集
　記念館を創った人々……(2)
　創設25周年に寄せて……(3)～(5)
　移情閣友の会25周年……(6)
賛助会講演会報告……(7)
賛助会通信……(7)
記念館ニュース……(7)
愛知大学展示会・講演会……(7)
移情閣で「大アジア主義」を読む……(8)
シンポジウム「中華人民共和国の60年」……(8)
世界の孫文記念館（孫文記念館の「集い」）……(8)
辛亥革命と日本（王敬祥・三上豊夷）……(9)
孫文研究会通信……(9)
移情閣友の会通信……(9)
映画『孫文』レビュー……(10)
編集後記……(10)

25周年記念特集　Part 1　－記念館を創った人々－

㈶孫中山記念会 参与　山田　敬三

孫文記念館は1984年11月12日の孫文誕生日に「孫中山記念館」として開館しました。日本で唯一の孫文記念館として、今では国際的にも知られる施設になっています。この30年あまり記念館の活動にかかわってきた一人として、その草創期を振り返ってみたいと思います。

1.「孫中山紀念館」建設委員会

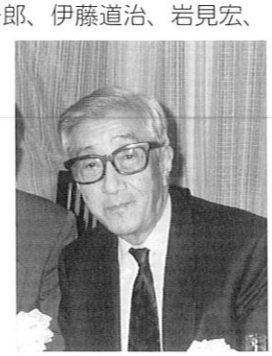
記念館の前身である移情閣は、1960年代には神戸華僑の皆さんによって維持されていましたが、度重なる台風の被害で損壊し、それを修復するため、孫文生誕百周年にあたる1966年８月に「孫中山紀念館」建設委員会（林同春委員長・陳徳仁副委員長）が結成され、募金活動が行われました。修復工事完了後の1968年、兵庫県は一般公開を前提として記念館の設置管理許可を出しました。しかし必要な条件が整わず、その後も公開されることはありませんでした。

2. 孫文研究会の結成

1972年、山口一郎神戸大学教授の呼びかけで関西地区の孫文研究者が定期的に集まり、『孫文選集』の編纂を始めました。この会は後に孫文研究会となり、『孫文選集』全三巻も社会思想社から刊行されます。この頃、陳徳仁氏から山口氏へ、また神戸華僑聯誼会（現在の神戸華僑総会）の石嘉成氏から山田へ、孫中山記念館公開への協力要請がありました。こうして孫文研究者の間でも、記念館開設に向けた模索が始まったのです。

3. 孫中山記念会設立準備委員会

移情閣の建築を記念館のハードとするならば、ハードを動かすソフトとなるべく1982年に結成されたのが、孫中山記念会設立準備委員会です。委員長は、須田勇氏（元神戸大学学長）、華僑側からは陳舜臣、陳徳仁、李万之、林同春の四氏、日本人側からは山口一郎、伊藤道治、岩見宏、山田敬三ら神戸大学関係者と大阪外国語大学の伊地智善継、神戸商科大学の南部稔の各氏が参加しました。


須田勇氏

なお、この委員会とは別に神戸華僑総会には「孫中山紀念館開館研究小組」（王柏林座長）が設置されており、1981年３月23日付で「報告書」をまとめています。

4. 兵庫県のサポート

1982年、移情閣を県費で改修するため、山口一郎氏から李万之華僑総会会長あてに、移情閣を県に寄贈するよう「要請書」が提出されました。日中国交正常化10周年を記念して寄贈が実現、翌年には「県立舞子公園移情閣の管理運営に関する覚書」が調印されました。

建物は約１億4500万円の経費をかけて立派に修復、さらに50台近くの収容力を持った駐車場も付設されました。明石海峡大橋架設のため1994年に移設されるまでの10年間、記念館が運営できたのはこの駐車場から得た収益があったからです。

明石海峡大橋架橋前の移情閣
（1986年）

5. 開館と財団の成立

開館に際しては財団の設立が必要条件とされており、基金集めが急がれました。孫中山記念会設立準備委員会は「財団法人孫中山記念会設立準備委員会」の母体となり、1984年末には「財団法人孫中山記念会設立に係る募金についてのご協力方お願い」が、坂井時忠知事、宮崎辰雄神戸市長、石野信一神戸商工会議所会頭らの連名で発せられ、当初目標とされた5000万円の募金に着手しました。

坂井時忠氏

1988年、財団法人孫中山記念会の設立が認可されました。初代理事長には坂井時忠元兵庫県知事が就任され、梅田善司川崎重工業株式会社会長、大庭浩同社会長、現在の貝原俊民前兵庫県知事へと引き継がれています。

記念館の初代館長には山口一郎氏、その後の歴代館長には陳徳仁氏、狭間直樹氏、そして現在は安井三吉氏が就任しています。また25年間にわたる記念館の活動が、事務局長を中心とするスタッフや研究員、移情閣友の会のボランティアの方々など、多くの力によって支えられてきたことはいうまでもありません。2000年、孫中山記念館は明石海峡大橋のたもとに復原開館、2005年には孫文記念館と改称されて今に至っています。

6. これからの孫文記念館

貝原理事長のお言葉にもあったように、孫文記念館の重要性は「孫文を介しての日中両国民の連帯」にあります。孫文は中国大陸でも台湾でも、今なお、というより、今まさに重視されている人物です。私は、かつて孫文が世界を見すえたように、より広い視野から孫文の業績を顕彰、研究しながら、現代中国への理解を深めてゆきたいと願っています。

25周年記念特集 Part 2 ー創設25周年に寄せてー

孫文記念館25年の賜物

河合 純子

1985年12月号の月刊神戸っ子に「移情閣によせて」と題した拙文が残っている。末尾に私は播磨灘に沈む夕日に染まり、暮れなずむ淡路、明石の灯りが点り始める中を記念館から家路を急ぐ自分の姿を描いている。その2年前ＰＴＡ活動で開館前の記念館を見学、そのご縁で館の受付業務等を手伝う事になり、ＰＴＡ仲間3名でローテーションを組みお手伝いを始めた。会計の喜多村さん、受付の島田さん、そして私は「この記念館が人の集まる日中交流の拠点となるよう友の会を結成しましょう。河合さんやりなさい！」との故須田勇先生の一声で友の会の事務を担当することとなった。開館一周年記念に「陳瞬臣とアグネスの集い」を神戸国際会館大ホールで開催し成功裏に終えたが、その準備に毎日没頭していた時の様子が冒頭の神戸っ子の文章に伺え、25年の歳月が走馬灯のように懐かしく思いだされた。公開講座、バス旅行、移情閣まつり等の行事や中国語講座、同好会活動、「孫文の足跡をたどる」中国旅行で交流の輪を広げ15年があっという間に過ぎ、その間の奉仕に対して友の会事務局長を辞した2000年には兵庫県より県民功労賞を授与され、県民交流の船の副団長として香港、西安、洛陽、上海を訪れる機会も頂いた。しかし記念館からの何よりの大きな賜物は「人の輪」である。娘時代に日本政府青年海外派遣団員としてオセアニアを訪問、結婚後10年近くをカナダで過した私にとって中国は一番関心が薄く遠い国であったが、今では身近な隣国となり、多くの華僑の皆様ともお知り合いになれた。これからもこの繋がりを大切に愛する舞子の地で歩み続けたい。

＊河合純子氏は、元移情閣友の会事務局長で、現在は㈶孫中山記念会評議員。兵庫県国際交流協会友の会理事、日本・カナダ会代表や移情閣友の会のコーラス同好会代表なども務めておられます。

移情閣をバックにした友の会会員
（「ニューひょうご」1986年2月号、河合氏は右から7人目）

戸谷さんの思い出

山口 登

私が戸谷さんに初めてお会いしたのは、大学卒業後の1953（昭和28）年4月、九州電力が宮崎県椎葉村に建設中であった上椎葉ダム（わが国初の本格的アーチダム、高さ110メートル）の工事事務所でした。戸谷さんは、いつも笑顔を絶やさず温厚な人柄で事務所の皆から慕われておりました。

上椎葉時代、特に印象に残っている出来事があります。或る夜、戸谷さんから「済まんが産婆さんを連れて来て欲しい」と、寮に電話があり、夜半前の道を30分程歩いて村役場近くの産婆さんを迎えに行きました。当夜は停電で二間の小さな宿舎の隣室で寝そべりながら雑談しておりましたところ、夜明け前に隣の部屋からオギャーと産声が聞こえて、お嬢さんが誕生しました。電気のない下でのお産は大変だったことでしょう。その時のお嬢さんも、今ではおばあちゃんになっているかも知れません。

戸谷さんが副知事をなさっている頃、一郎兄は神戸市内のマンション住まいで、私は時折兄の家を訪ねておりました。私が戸谷さんに会いに行こうとしましたら、兄が一緒に行っても良いかと尋ねるので電話しましたところ、弁当を用意しているからとのお返事でした。弁当を食べながら兄は一時間程、孫文記念館開設の夢を熱く語っておりました。土木屋ながら文学的素養の豊かな戸谷さんはすぐに賛同くださり、早速事務系の貝原副知事（後に県知事）に話して記念館設立準備の予算を計上して下さいました。当時、兄は資金調達にあちこち走り回っておりましたが、いずれも実らずに苦心しておりました。これで資金調達が出来たと非常に喜んでいたことを覚えております。孫文記念館が今日あるのも、両副知事の御尽力の賜と思っております。

戸谷さんと私のダム時代の縁、兄と戸谷・貝原副知事との縁が今日の孫文記念館をあらしめたものと思っております。戸谷さんと兄の二人はすでに世に居ませんが、天から一緒に記念館を見守っていることでしょう。

＊戸谷松司氏は、1921（大正10）年生まれ。兵庫県副知事（1976～83年）を経て、1983年より95年まで姫路市長。1999（平成11）年6月、77歳で死去。

＊山口登氏は、山口一郎初代孫文記念館（当時は孫中山記念館）館長のご令弟。

戸谷松司氏

移情閣回想

石嘉成

私の若い頃、移情閣を管理していた中華青年会は毎年近くの砂浜で海水浴大会を開いていた。その後海水の浸食で砂浜が狭まり、そこにテトラポットが積まれるようになってからこの行事は無くなった。

1950年代、神戸中華青年会が管理していた頃の移情閣

1965年、台風20号が神戸を襲った。移情閣に付設した木造2階建ての洋館の屋根の半分は吹き飛ばされ、骨組だけが残り、無残な姿になってしまった、移情閣自身も屋根の銅板がはがれ、海側の鉄扉が地面に落下していた。防犯上無防備な状態で、扁額、椅子、机などを同文学校に預かってもらった。椅子を運び出すとき、そこに〈呉家〉の焼印を目にし、それらが呉錦堂が建てた当時から置かれ、数代の子孫が使用してきた歴史のある貴重な物であることを改めて認識した。

建物の再建、修復はどうするのか、問題があまりにも大きく、管理者の中華青年会だけでは力不足だった。先ず神戸華僑に影響力のある先輩にも相談し、全面的に協力を得ることになった。そこでは、再建後移情閣の使用目的をどうするのか検討すべきだとの話も出された。丁度この時期、東京はじめ各地の華僑総会では翌1966年の孫中山生誕100周年記念行事にどう取り組むかがテーマに上っていた。神戸から移情閣の実状を訴え、各地にも募金の協力を要請した。ここでも募金の目的が検討された。その結果、移情閣が孫中山先生とゆかりのある場所であるので建物をその記念館として開こうということで話がまとまり、地元神戸もその案に賛同した。

建物は元通りに復原する予定であったが募金が目標に届かず、止む無く廊下部分と炊事場の平屋建てをはずして建て直すこととした。孫中山記念館の看板も掛けられた。開館展示に必要な資料を北京の僑務関係の組織を通じて北京、南京の中山記念館の展示複製品の提供を要請した。しかし、たびたび督促したが音沙汰もなかった。文化大革命で「海外関係」に敏感な時期だったからであろう。兵庫県当局は来客の便にと移情閣の東側に駐車場も設けてくれたがその好意に報いることができなかった。

台風の被害を受けて損壊した移情閣（1966年）

中日国交回復後、山口一郎、陳徳仁両先生のご尽力と県当局の積極的な支えによって中身の充実した孫中山記念館として開館することができ、今では建物も元の洋館に復原され、研究者の方々の献身的な努力よって、兵庫県から内外に発信する孫文記念館となった。多謝！

＊石嘉成氏は、現在、㈶孫中山記念会常務理事で、神戸華僑総会理事を務めておられます。

「移情閣」閑談

南部　稔

二人の夢多き人がいた。一方は山口一郎先生、もう一方は陳徳仁先生であった。二人が顔を合わせると、「あの移情閣、なんとかならないかなあ」とよく語り合っていた。普通、夢想家の話はいつのまにか霧散していくものだが、この人たちにとっては夢ではなく、何とかなるはずだとの思いが強かった。

山口一郎氏

すると、いつしか懐妊の兆候らしきものがあらわれたと悟られたのか、山口先生はある学会の休憩時間に私のそばによってきて、「南部さん、移情閣を何とかして日中友好のシンボルにしたいと思うんだけど、手伝ってもらえないでしょうか。おそらく2、3億円くらいは集まるからその手立てをお願いしたいと思ってねえ」といわれた。とても本気になれなかったが、「いいですよ」と軽い気持ちで引き受けた。

それが大変なことになったというのは、その懐胎期間は実に10年余りにも及んだからである。だが、今にして思えば、それは決して無駄な時間ではなかった。須田勇元神戸大学学長を委員長にして毎月のように会議を重ねて丁寧な準備をしてきたからこそ無事、誕生にまでこぎつけられたのである。ところが、揺籃期がまた大変であったが、各準備委員は手ずから育てるといったように、労苦を惜しまない作業を続けてきたことによって成長を遂げてくれた。

そしていまや成熟期を迎えて内外に広く知られる孫文記念館として屹立するまでになった。「夢多き人」だったという点でお二方は孫文に通ずるところがあり、そうした熱い思いがあったからこそ今日があるのである。

＊南部稔氏は、孫中山記念会設立準備委員会の委員を務められ、現在は㈶孫中山記念会副理事長。

陳徳仁さんの思い出

呉伯瑄

陳徳仁氏

孫文記念館創設25周年、お祝い申し上げます。

戦争が終って間もなくの頃、陳徳仁さんが当時舞子にあった我が家にひょっこり訪ねて来られました。1945年6月の空襲で焼け出されてしまい、しばらく一家で住まわせてもらえないだろうか、とのことでした。陳さんは、奥さんが楊寿彭のお嬢さんであること、呉錦堂と楊寿彭の生前のつながりについて詳しく説明されました。呉家は、籠池の家が大空襲で全焼し、一族が舞子の家に集まっていましたが、まだ空き部屋もありました。私たち（私自身はまだ14歳でしたが）は勿論承諾しました。約3年、陳さん一家は、私たちの家におられました。46年初、移情閣の管理を陳さんが代表されていた神戸中華青年会に委ねることにしたのもそのようないきさつがあったからです。その後陳さんは、長く私の後見人をして下さいました。

1960年代半ば、移情閣は台風によって大きな被害を受けました。陳さんら神戸華僑の皆さんは、募金して修復されました。実はこのころ、陳さんから移情閣を呉家に返還したいという申し出もありましたが、公園の一部で他に転用もできないことから辞退しました。陳さんは今後移情閣をどうすべきかということで大分悩まれていたようでした。

その後、陳さんは山口一郎先生らと各界の方々に働きかけた結果、いろいろご苦労の末、移情閣の県への寄贈、孫中山記念館の創設が決まって、ひと安心されていました。そんなある日、陳さんから電話があり、呉錦堂の記念として、扁額3点と呉錦堂らの愛用したベッド、机などを引きとらせていただきました。扁額は、故郷慈渓の呉錦堂の墓に奉納し、ベッドは後に館に返却し、修復されていまは記念館の3階に安置されています。

来年春には、武藤山治邸が孫文記念館の東向かいに移転してくるとのことです。昔、移情閣は、武藤邸の二、三軒西にありました。呉錦堂と武藤山治は長い別離を経て、再び隣人となるのですね。楽しみにしています。記念館のいっそうの発展を心から願います。

＊呉伯瑄（ごはくせん）氏は、移情閣の創建者、呉錦堂（1855-1926）のご令孫で、呉錦堂有限会社社長。

林同春先生を悼む

石嘉成

先生の体調があまりよくないと聞いてはいたが、まさかこんなに早く逝ってしまわれるとは想像もしていなかった。先生は中国福建省の出身で、1961年、自ら準備委員長になって、京都東山の霊山新温泉で第1回福建同郷懇親会を開催した。第3回は63年、有馬温泉に200人もの同郷人が集まり、盛大だった。当時は、日本と外交関係を持っていた台湾の領事館が華僑や華僑団体の新中国を支持する行動に対して非常に敏感だったが、先生はあえてそのような団体の代表をも懇親会に招待された。この懇親会は各地の同郷会の持ちまわりで、今年で49もの回を重ねている。

阪神淡路大震災は間もなく15年目を迎える。震災発生当日の午後、先生は中華同文学校に駆け参じた。学校の被害状況が比較的軽いのを確認し、教室も利用できると見るや、即、華僑総会会長として理事役員と華僑各団体の責任者で連絡のとれる者すべてを同文学校に招集した。そして神戸華僑震災対策本部を立ち上げ、すぐに華僑の安否、建物の被害状況を同郷会毎に手分けして調査をすることを決めた。また同文学校を近隣住民の避難場所として開放し、南京町広場で炊き出しを行い、温かい餃子、焼きそばを作って少しでも市民に提供しようと決め、実行に移した。

また、先生は孫中山記念会が財団として発足して以来、常任理事、副理事長として大任を果たして来られたが、体調がすぐれないとのことで今年度の記念会の役員改選を機に退任された。かつて移情閣を神戸中華青年会が管理していたとき、1965年の台風で別館が壊滅的な被害を被ったが、それを修復する資金を青年会だけで集める見通しは全くなかった。中国は文化大革命のさなか、それを支持する団体に対し良い風が無かった時期である。そのような時にはいつも先生に相談し解決をお願いしたものである。その後孫中山記念会を財団として組織するための原資集めにも故陳徳仁先生とともに華僑側としての責任を尽くされた。

先生は若い時から華僑の教育事業に一貫して熱意をもたれ、華僑の大同団結に力を注ぎ、地域住民との友好に尽力され、中国と日本との友好、交流に大きな役割を果たしてこられた。先生から社会事業についてまだまだ多くのことを学ばなければならないこのときに、あまりにも早く私たち華僑と離ればなれになられてしまった。残念である。ご冥福をお祈りしたい。

永垂不朽。

移情閣友の会総会での林同春氏（2008年4月）

25周年記念特集　Part 3　－移情閣友の会25周年－

移情閣（孫文記念館）友の会25周年記念行事報告

11月14日(土) 舞子ビラ　あじさいホールにて

移情閣友の会企画運営委員長　佐瀬　祥一

1984年11月12日に孫中山記念館が開設されてまもなく、その活動を地域市民の立場から支える団体として移情閣友の会が創立され、日中並びに国際間の文化交流を目指して各種の文化活動を行ってまいりました。本年、創立25周年を記念し、友の会の活動と文化交流活動の輪をより一層広げるため、「日中文化・芸術交流＆地域市民交流のつどい“玉岡かおる講演会と中国音楽・越劇を楽しむ会”」を開催しました。関係各位のご支援により、300名を越える多数のご参加をいただき、盛大な催しとすることができました。心よりお礼申し上げます。

作家・玉岡かおる氏の講演「アジアの王道　日本の誠道　こころの革命成らしめるもの」では、孫文を助けた多くの日本人が存在したことや、移情閣（孫文記念館）の存在によって私たちが孫文や日中の歴史と繋がることなどについて語られました。続いて、舞子中学校吹奏楽部の皆さんの元気あふれる演奏、二胡同好会、コーラス同好会の演奏、25周年記念歌「かけはし舞子の移情閣」の披露がありました。戴茜さんによる中国古箏の心に響く演奏、中国の宝塚といわれる上海越劇院の男性役トップスター・章瑞虹さんによる越劇の紹介は来場者を魅了しました。13：30から17：00までの長時間にわたる催しでしたが、すばらしい講演・演奏を楽しみながら、瞬く間に時間が過ぎてゆきました。

玉岡かおる氏

舞子中学校吹奏楽部

戴茜さんによる古箏の演奏

二胡同好会

コーラス同好会

章瑞虹さんによる越劇披露

かけはし舞子の移情閣

作詞　小泉美喜子
作曲　張　文乃

一、朝日きらきらちぬの海
行き交う船の絵模様は
舞子の浜の漁終えて
声たからかに漕ぐ船の
あーあーかけはし舞子の移情閣

二、真昼の太陽さんさんと
孫文慕う呉錦堂
建てし館は日中の
絆となりていまここに
あーあーかけはし舞子の移情閣

三、夕日は沈むあかね雲
明石海峡大橋は
舞子・淡路にうるわしく
紅く輝やき照り栄えぬ
あーあーかけはし舞子の移情閣

四、月は昇りぬ舞子浜
橘のたもとの六角堂
君と語りし孫文の
蓮の花びら忘れじと
あーあーかけはし舞子の移情閣

永遠に栄えし友好の
かけはし舞子の移情閣
あーあーあーあー

㈶孫中山記念会賛助会 講演会報告
中国経済の現状と課題
―4兆元の経済対策は8％成長を実現できるか？―

講師　田中　修
（日中産学官推進機構特別研究員・東京大学客員教授）

田中 修氏

本講演会は、昨秋のリーマンショック発生後、中国政府の国際金融危機対策の成否を検証する時宜を得た企画でした。田中氏は、中国の経済政策決定に関わる共産党、国務院などの公開資料を駆使して現状をリアルタイムにフォローする分析手法を得意とされています。

講演要旨：今年3月の全人大での政府活動報告では、「科学的発展観を深く貫徹し、経済の平穏で比較的速い発展を経済政策の第一の任務とする。マクロ・コントロールを強化改善し、内需とりわけ消費需要の拡大・発展方式の転換・経済構造の戦略的調整の加速・改革の深化・対外開放水準の引上げ・民生の改善と社会の調和の促進に力を入れる」という経済方針が掲げられた。5月の国務院常務会議では、「当面及び今後の一時期、外需の縮小による輸出減少は、わが国の経済成長が直面する最大の困難である。内需拡大と外需安定を結びつけて外需を安定化し、国際金融危機がわが国の対外貿易に与える影響を最低程度に抑える」ことが確認された。また中国社会科学院は、①輸出制約の持続、②高貯蓄・低消費の傾向、③生産能力の過剰、を経済回復の制約要因として挙げている。現時点において、中国経済の回復を速断できないが、回復はV字型にはならず、長期停滞のU字型あるいは中央投資の息切れとともに2番底に向かうW字型となる可能性も高い。

田中氏によりますと、その後、温家宝総理は9月の世界経済フォーラムで成長率8％の達成可能を表明しました。4兆元の包括的計画は、内需拡大を主として現在から長期にわたる成長維持と構造調整を実現し、政府と市場の働きを統一、発展と改革を共に促進することを強調しています。今後の中国の持続可能な発展の基礎とされるのは、①就業率、②経済成長の質・効率、③省エネ・汚染物質排出削減、の3指標です。（孫中山記念会常務理事：片山 啓）

賛助会通信

11月2日、神戸ポートピアホテル生田の間にて、下記の講演会を開催いたしました。

■「最近の日中関係と中国情勢」

講師　垂 秀夫
（外務省アジア大洋州局 中国・モンゴル課長）

日中外交の最前線に立つ垂氏は、自らの経験や具体的な統計を織り交えながら、信頼できる情報を収集して客観的・実証的に中国を理解することの困難と重要性について語られました。さらに、新政権の下での「友愛外交」「東アジア共同体構想」を実現する条件として、前政権で確立しつつあった戦略的互恵関係を継承すること、歴史的・政治的な日中間の「ルール」を遵守すること、「民意」の力を意識しておくことなどをあげられました。日中関係や現在の中国の姿を理解し、今後への展望を開く貴重な機会となりました。

（研究員：武上真理子）

垂 秀夫氏

記念館ニュース〈2009年7～12月〉

＊　「関西古今行」取材団の来館

9月6日、観光庁の中国記者招請事業により、『人民日報』、『広州日報』、『新民晩報』（上海の有力紙）、「新浪網」（中国で最も有名なポータルサイト）など計13社の中国メディアが取材のため来館、陳來幸副館長がご案内した。

＊　中国財政部幹部が来館視察

10月22日、総務省主催の日中地方行財政セミナーに参加された中国財政部の幹部5名が記念館を視察した。ご一行は王柏林名誉館長及び徐小潔主任研究員の案内により、神戸が孫文や中国革命と深いかかわりがあることに感激し、熱心に館内を見学した。

＊　「旧木下家住宅」公開

10月24日より、県立舞子公園内で国登録文化財「旧木下家住宅」の一般公開が開始され、公開初日には、記念講演会などが開催された。

＊　中国青年指導幹部訪日団の来館

11月11日、中国青年指導幹部訪日団29名が来館された。皆さんは陳來幸副館長の説明に熱心に耳を傾け、特に孫文が日本亡命中に一般人へ贈った揮毫に興味を示された。「日本に孫文を記念する施設があるのは本当に嬉しい」との感想ももたらされた。　（主任研究員：徐小潔）

愛知大学東亜同文書院大学の神戸資料展示会・講演会
「孫文 ― 神戸、長崎そして東亜同文書院・愛知大学 ―」

愛知大学（愛知県豊橋市）の前身で、1901年に上海で設立された東亜同文書院大学のあゆみをたどる資料展示会が、11月2～4日の3日間、神戸国際会議場で開催された。同大学とゆかりの深い山田良政・純三郎兄弟は、孫文の支援者として知られる。会場には、山田兄弟と孫文の親交の証となる資料や、孫文記念館が所蔵するパネル15枚も展示された。また11月3日の講演会では、安井三吉孫文記念館館長による「孫文と神戸」のほか、「東亜同文書院とそのあゆみ・大旅行」、「孫文と長崎」、「孫文と東亜同文書院・愛知大学」と題する講演が行われ、約160人が参加した。

移情閣で孫文「大アジア主義」講演を読む

神戸大学研究員
田中　剛

7月23日、神戸大学人文学研究科と孫中山記念会は、「古典サロン　移情閣で孫文『大アジア主義』講演を読む」を共催した。1924年に孫文が神戸市民を前に熱弁をふるった「大アジア主義」講演をテーマに、その歴史的意義と、日本と中国、アジアの今後について考えるものである。当日は午前、神戸大学付近より孫文記念館まで、中華同文学校、関帝廟、兵庫県庁「大アジア主義講演の地」プレートなどを見学しながら貸切バスで移動した。午後からの講演会では、市民、神戸大学学生・教職員など、計41名の参加を得た。安井三吉氏が、「大アジア主義」講演に関する最新の研究成果や孫文と神戸の「記憶」「絆」について講演、続いて金玄氏（神戸大学院生）が韓国の孫文研究を紹介し、張傳宇氏（同）が事前勉強会で得た知見や疑問を報告した。ディスカッションでは、現代のアジアの若者たちが「大アジア主義」講演のメッセージをどう受け取るのか、といった広範かつ活発な議論がみられた。

国際シンポジウム

中華人民共和国の60年―中国はなにを成し遂げ、どこに向っているか

今年は中華人民共和国建国60周年にあたる。建国以来大きな変化を遂げてきた中国は、これからどこに向うのか？その答えを探るために、10月17日、㈶孫中山記念会は日本現代中国学会と共同で、標記の国際シンポジウムを開催した。朝から激しい雨が降っていたにもかかわらず、研究者と一般市民を合わせて300名近くの参加者が、会場となる神戸大学百年記念館に集まった。

シンポジウムでは、ＮＨＫで長年中国報道に携わってきた長井暁氏が、映像資料を用いて中華人民共和国の60年を回顧された。続いて、現在の中国で最も影響力を持つ「公共知識人」の一人とされている清華大学歴史系教授の秦暉氏と、かつて神戸大学で教鞭をとり現上海交通大学法学院院長の季衛東氏が、今後の中国の行方について講演された。その後のディスカッションでは、歴史学、法学、経済学、社会学など、さまざまな視点から中国の現状と未来について熱い議論が交わされた。　（主任研究員：徐小潔）

世界の孫文記念館（その４：孫文記念館の「集い」）

北京と台北において、孫文を記念するさまざまな機関や施設が一堂に会する場がもたれました。孫文を「絆」とするグローバルなネットワークが、さらに広がりつつあります。

■「孫中山宋慶齢紀念地聯席会議」

「孫中山宋慶齢紀念地聯席会議」会場風景

世界の各地に孫文や宋慶齢の業績を記念する施設が散在している。その数は677に達するといわれており、なかでも活発な活動を行っている記念館がこの20年来定期的に会合を持ち、その研究成果をまとめながら交流を深めている。

第１回会議は1989年５月、南京中山陵園管理局江蘇省孫中山研究会が主催して南京で開催され、ここで「孫中山宋慶齢紀念地聯席会章程」が作成された。以後、香港（2006年）を含む中国の各地で会合が持たれ、今年の第21回会議は５月27日から31日まで、北京市政協の管轄下にある中山堂が中心となって運営され、日本の孫文記念館からは初めての参加となった。

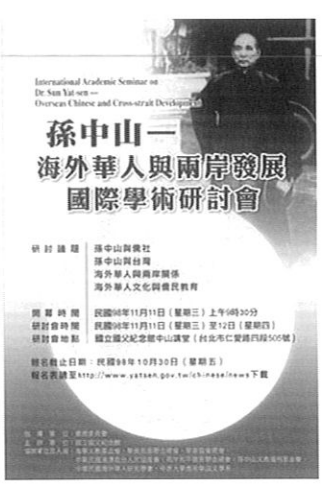
最終日には改修中であった宋慶齢同志故居紀念館のリニューアル・オープン式典が賈慶林政治協商会議主席臨席の下に開催され、会議の参加者全員も出席した。来年はマレーシア、辛亥革命百周年にあたる再来年は台北でそれぞれ会議が開かれることになっている。ちなみに、本館は第39番目の施設として正式会員に登録された。(参与：山田敬三)

■国際シンポジウム・フォーラム「孫中山―海外華人と両岸の発展」・「世界孫中山紀念館円卓フォーラム」

11月11－12日、台北の国父紀念館主催による標記二つの国際会議に参加した。会議には、台湾をはじめ大陸、香港、シンガポール、マレーシア、アメリカ、フィリピンなど世界各地の研究者、孫文・華僑華人関連の記念館、機関、団体の代表が参加した。シンポジウムでは、孫文を柱として華僑華人、両岸関係という共通の問題意識をベースに報告と討論がなされた。フォーラムでは、各館の現状と課題が報告され、今後の協力を確認し合った。

私にとっては、今回世界各地の記念館の館長や責任者の方々と直接お話することができ、大変よい機会になった。神戸の孫文記念館の存在と特徴についても理解を深めてもらえたのではないかと思っている。第二日が、ちょうど孫文の誕生日に当たり、参加者一同、巨大な孫文像に献花したが、「辛亥革命100周年」が日一日と近づいていることを多くの参加者が意識されているように感じられた。

（館長：安井三吉）



「孫中山―海外華人と両岸の発展」シンポジウムのポスター

辛亥革命と日本 ～辛亥革命100周年へ向けて～その2

王敬祥（1872-1922）／三上 豊夷（1863-1942）

神戸は、孫文と彼の革命を支援する華僑や日本人が暮らす国際都市だった。さまざまな「神戸人」の中でも、辛亥革命への貢献が際立つのは、王敬祥と三上豊夷の二人である。

王敬祥の本籍は、福建省金門。商社「復興号」の経営者として、神戸実業界で日中の信頼関係を築いた。武昌蜂起から約1ヵ月後の1911年11月26日、王は神戸華僑約1300人を結集して「中華民国僑商統一聯合会」を結成、「宜しく全力を挙げて革命軍に声援を与え中華民国新政府成立の期を速かならしめざるべからず」と高らかに宣言して募金活動などを展開した。このときの支援に対し、中華民国臨時大総統に就任した孫文からは感謝状が送られた。また、辛亥革命直前の広州蜂起の犠牲者を追悼する「黄花崗七十二烈士之墓」の背後には、「紀功坊」と名づけられた献石のモニュメントが据えられ、「中国国民党神戸支部」のほか王敬祥ら8名の神戸華僑献金者の名が刻まれている。

三上豊夷は、越前丸岡藩（現在の福井県）出身。神戸における個人船舶業者の筆頭格だった三上と孫文の出会いは、1906年秋頃といわれる。翌年10月、三上は孫文の要請に応じて幸運丸をチャーターし、武器弾薬を革命軍に送り届けようとしたが失敗、多大な損失を一身に負った。辛亥革命に際しては、中央銀行設立案を擁して日本政府と孫文の仲介役を務めたほか、持ち船を提供して革命軍の兵員輸送まで引き受けた。1913年2～3月に来日、各地で国賓待遇の大歓迎を受けた孫文は、過密スケジュールの合間を縫って三上の私邸に足を運んだ。いつの日か孫文の「大業」が成就することを確信しつつも、「但し事の成るは予の子か或は孫の時代なるべし」と語っていたという三上の喜びは察するに余りある。

ところが、この来日からわずか半年後の8月、孫文は袁世凱打倒を期した第二革命に敗れ、一転、亡命者として海路日本を目指した。三上は孫文の入国に難色を示す日本政府の説得に奔走し、8月9日深夜、松方幸次郎（川崎造船所社長）とともに孫文の神戸上陸を成功させた。翌10日早朝の神戸埠頭には、孫文の出迎えを装う王敬祥らの姿があった。袁の放った刺客の手から孫文を守るための陽動作戦で、神戸の日本人と華僑の見事な連係プレーが孫文を窮地から救ったのである。

この後、王敬祥は中華革命党の神戸大阪支部長などを務めて孫文を支援し続けたが、三上と孫文の関わりについては明らかではなく、王と三上が神戸を舞台に親しく交わったという記録も残されていない。だが、二人が孫文に賭けた想いは後代に引き継がれ、王敬祥の孫にあたる王柏林氏は孫文記念館名誉館長として、三上豊夷の曾孫である三上隆氏は孫文研究会の会員として、「神戸と孫文」の今を支えておられる。

（研究員：武上真理子）

王敬祥

三上豊夷

孫文研究会通信

＊2009年度（7～12月）活動報告

・『孫文研究』46号発行（9月）

・秋季例会（「孫文2009」の一環）：11月21日㈯
ＫＣＣビル10階　会議室
研究報告「太平洋を越えるひとと『国家』」
（園田節子：神戸女子大学准教授）

＊2010年度（1～6月）活動予定

・孫文研究会総会、研究例会：1月11日（月・祝）
ＫＣＣビル10階　会議室
研究報告「辛亥革命期における日本人と会党」
（孫江：静岡文化芸術大学准教授）

・『孫文研究』47号発行（3月）

（孫文研究会代表理事：緒形康）

移情閣友の会通信

＊孫文蓮・中国系の花々を楽しむ会：8月4日㈫～9月30日㈬

㈳ひょうごツーリズム協会の助成を受け、舞子公園元気アップ事業「孫文記念館庭園で孫文蓮を楽しむ会／中国系の花々を楽しむ会」を開催しました。孫文記念館の庭園とその周辺に、孫文と縁の深い孫文蓮や中国系の花々を飾り、合計約15000人の皆様に鑑賞していただきました。

＊舞子公園夏まつり：8月8日㈯

「移情閣二胡同好会」「移情閣コーラス」が出演・演奏しました。

＊園芸講演会と観月コンサート・香り花の観賞会：9月5日㈯

中国系の香り花を楽しむ会と、「孫文蓮と中国系の花」に関する園芸講座を開催しました。夕方にはライトアップされた移情閣で観月し、「和太鼓」「二胡」「女声コーラス」「中国音楽演奏」等の野外演奏会を楽しみました。

＊新春のつどい

新年恒例の新春のつどいを、2010年1月24日㈰12時より、舞子ビラ神戸で開催します（会費：5000円）。

（移情閣友の会企画運営委員長：佐瀬祥一）

映画『孫文　100年先を見た男』レビュー

映画研究家
林　宏仁

この秋封切られた映画『孫文　100年先を見た男』(06年・中国製作)は、英領マラヤ(現マレーシア)・ペナンに革命資金の調達のため、亡命してきた孫文(ウィンストン・チャオ/趙文宣)と現地華僑の交流が綴られた作品であったが、特に印象深かったのが、本作が中国映画であるのに、中国近現代史上の偉人を教義的観点から美化して描いていないところであった。

例えば、最終的には孫文を支援することになる大多数のペナン華僑の実力者たちが、当初は彼のことを「何度も蜂起に失敗した口先だけの胡散臭い人物」とみなしていたり、孫文が革命同志から「資金を横領しているのではないか?」と疑われたり、華僑実力者に取り入るために、まずは彼の周辺人物を手なずけようと周到な画策を講じたり、取り入った華僑実力者の正体が実はアヘン窟の支配人であり、決して正義の人ではないこと等、「革命資金調達のためなら手段選ばず(汚れた金でも構わない)」という大変泥臭い孫文の一面が垣間見られた。

これは、従来の映画の中で、例えば劉文治が主演した『孫文』(86年)や『宋家の三姉妹』(97年)で描写されてきた清廉潔白かつ聖人君子然とした孫文像とは明らかに一線を画するもので、本作では非常に人間味溢れる人物として活写されているのが新鮮であった。

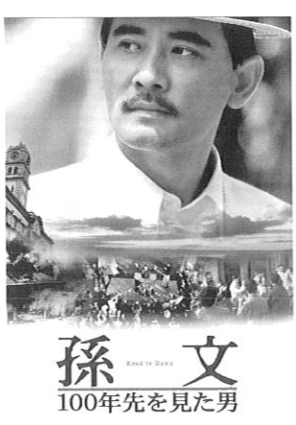
また、孫文の最初の妻である盧慕貞や、有名な宋慶齢以外の女性とのロマンスが映画で描かれたのも初めてのこと。本作に登場する陳粹芬(ウー・ユエ/呉越)は、孫文が失意に打ちひしがれていた時期を支えた女性として、研究者や歴史学者の間では知られた存在ではあるが、映画を通じて公にするというタブーを覆すことができたことに対して、時代の流れを感じさせられる。

辛亥革命(1911年)から98年、孫文没(1925年)後84年、本当の意味で、ようやく彼の実像に迫れる作品が登場したことはまことに感慨深い。これが毛沢東や周恩来、鄧小平など、中国現代史上の偉人ならそうはいかない。彼らが映画で描かれる際はいまだ美化されるきらいがある。

歴史上の英雄の実像を教義的観点ぬきに、映画の中でいきいきと描写するのには、没後長い時間を経ないと不可能であることを実感させられた作品であった。

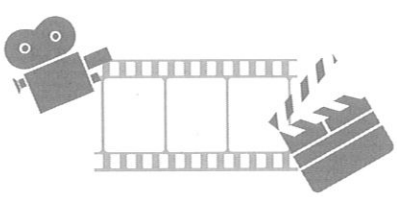
＊映画『孫文　100年先を見た男』は、角川映画の配給で全国公開されました。神戸、京都などでの公開は好評のうちに終了いたしましたが、大阪(高槻)では2010年1月9日からの上映が予定されています。その他の地域での公開スケジュールなど、詳しくはHPでご確認ください。
(http://www.kadokawa-pictures.co.jp/official/sonbun/index.shtml)

＊林 宏仁氏は、神戸華僑歴史博物館事務局長も務めておられます。



『孫文　100年先を見た男』
パンフレットより

マレーシア版『夜・明』
パンフレットより



【おことわり】

今号の「資料室便り　記念館の所蔵資料探訪」は、都合により休載させていただきます。次号にご期待ください。　(編集部)

編集後記

2009年11月19日、孫文記念館に衝撃が走りました。巨星、墜つ――孫文記念館をその誕生から今の姿にまで導いてくださった林同春先生は、創設25周年の記念日からわずか1週間後、はるか彼方に旅立ってしまわれました。記念館の草創期を振り返った「孫文2009」特別展や、移情閣友の会25周年記念行事をご覧いただけなかったことが、残念でなりません。

まもなく迎える2010年、記念館は次の目標となる30周年に、そしてさらにその先へと向って新たな一歩を踏み出します。林同春先生、これからは陳徳仁先生や山口一郎先生らとご一緒に、天上から私たちのあゆみを見守り、行く先を照らす光であってください。本当に長い間、ありがとうございました。　(M.T)

孫文記念館館報　『孫文』
第4号　(2009年12月20日発行)
発行者　財団法人 孫中山記念会
〒655-0047　兵庫県神戸市垂水区東舞子町2051
Tel：078-783-7172　　Fax：078-785-3440
e-mail：sunwen20@aioros.ocn.ne.jp
URL：http://www.sonbun.or.jp
(題字は孫文記念館所蔵の孫文自筆の書より。ただしオリジナルは縦書き)